

セミに出会った大学生

福岡県 時田 藍子

七月半ばの夕方六時半は、まだまだ明るかった。今日はもう家に帰ろうと、私は重いリュックを背負って大学の駐輪場にやって来た。すると、地面を何か茶色いものが動いているのが見えた。それは土から出て来たばかりのセミだった。私は驚いて思わずしゃがみ込んだ。たぶんたいいていの人がそうだと思うが、まさか今日、数年間眠り続けた寝起きのセミに出会えるなんて思ってもみなかった。羽化したばかりのセミの翅はオーロラのような色合いで透明なのだ、昔友達が教えてくれたのを思い出した。もしかしたら今からお目にかかれるかもしれない。

セミは、私の自転車の隣の放置自転車にたどり着いた。よかった。錆だらけのママチャリは誰も近づかないから、セミの羽化にびったりだろう。セミはスタンドの右側からよじ登り始めた。思ったより早い。そしてちよつと気持ち悪い。まさに昆虫といった感じの丸みを帯びたお尻をびくびくと振りながら歩くのが、なんとも言えず気持ち悪いのだ。しかし、重たそうな体を六本の細い脚が器用に運んでいくのは見事だった。セミは順調に登り、スタンドの一番上までやって来た。

行き止まりだ。だからそこで羽化を始めるのだろうかと思いきや、セミはまだここでは満足できないらしく次なる路に手を伸ばした。タイヤの留め具である。しかし、これが絶妙に遠くて届かない。しかもようやく届いたように見えても、留め具がゴム製であるがゆえに滑って掴めないのである。後ろ足で精いっぱい体を支え、出来るだけ体の上に持ち上げて前脚をしきりに伸ばすが、やはりダメだ。そしてその前脚のチリチリとした細かな動きがやっばりどうしても気持ち悪かった。それに、セミが羽化する場所をどういう基準で決めているのかわらないが、人間の私には今の場所がそのママチャリの中で最も安定しているように見える。だからなおさら空振りする前脚が残念だった。

ところが、驚くべきことにセミはその路に届いたのである。周りの錆を利用し、ゴムでないところに脚をかけて、重い体を何とか引き上げて進んでしまったのだ。思わず「おおっ！」と声が出た。小さく拍手も送ってしまった。一生懸命やってみるものだな、と思った。こんな小さな世界でも「努力は実を結ぶ」「継続は力なり」が実践されていることに感心する。

そうしてセミは、再びお尻を振りながら細い金属の棒（後で調べるとそれは泥除けステータという部品らしい）をズンズン進んでいった。いけいけ、セミ君。どうか適当な、君の気に

いる所で羽化しておくれ。いつのまにかそんな熱い視線を送っていた。セミは後輪の泥除けに到達した。脚の細かな爪が金属を引っかけてキルキュルと音をたてる。体の割に大きな音だった。泥除けは滑ってさすがに登れないので、たぶんここがセミのたどり着ける最も高い地点だ。もしセミが出来るだけ高いところを探しているのだとしたら、この辺りを検討するべきであろう。

しかし、セミは進み続けた。泥除けを通り過ぎてステアーを下っていく。このまま進むとまた留め具にぶつかり、もしかすると地面に到着してしまうだろう。それじゃただ遠回りしただけだ。また振り出しに戻ってしまう。

ちょっと待つんだセミ君、君は一体どういうところを目指しているんだ。やっぱり最初の留め具あたりが最適だったんじゃないか。あそこは足場も太くて安定しているし、高さも十分だったじゃない。一体いつまで歩き続けるのさ。

そういえば地上に出てからどれくらいで羽化するのだろうと思ってスマホで調べると、およそ三時間ということが分かって面食らった。セミは立ち止まる気配がないし、これはしばらくかかりそうだ。見届けたい気持ちはやまやまだが、私は明日の午前中に就職活動の面接がある。それも母校の高校のだ。「頑張ってね」と声をかけ、後ろ髪を引かれる思いで自分の自転車にまたがった。

また振り出しに戻ってしまいそうで心配でならなかった。ただ、よく考えると全く同じ地面に戻るというわけではない。厳密にはタイヤ一つ隔てた「別の地面」にたどり着くのだ。お尻を振りながら遠回りや寄り道をして、そうしていつか自分の飛び立つ場所を決めなくてはならない。それもたった一匹で。そこがどんな場所であれ、彼はオーロラの翅を背負ってもう一度この世界に生まれ、どこかに飛んでいって精いっぱい鳴くのだ。

なんだか広々とした軽やかな気持ちになった。まるで自分にも翅が生えたように。

もし明日、最近あった面白いことなどを聞かれたら、あのセミのことを話してしまおうかと思った。でも、それには夕暮れに一人で駐輪場に長々としゃがみ込んでいたことを話さなくてはならないというのに気付いて、やっぱりやめておこうと思った。